

合唱ができるまで

2006(平成18)年11月8日鑑賞(松竹試写室)



監督＝マリー＝クロード・トレユ (バップ、ロングライド配給/2004年フランス映画/98分)

……この映画はそのタイトルどおり、パリ13区にあるアマチュア合唱団の練習風景を淡々と描いたものだが、そこに強く惹かれていくのはなぜ……？それは音楽を学ぶことの楽しさやみんなで歌うことの楽しさを求める子供たちや老若男女がおり、それを教えてくれる先生が情熱と喜びをもってその仕事に取り組んでいるから。モーツァルト生誕250周年の今年、ヨーロッパ文明の水準の高さをあらためて実感！ 私もあらためて、ドレミファの勉強をしなければ……。

今年もモーツァルト生誕250周年！

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトが生まれたのは1756年。したがって、その生誕250周年となる今年2006年は、モーツァルトの生まれ故郷のザルツブルクやヨーロッパ諸国はもちろん、日本でも数々の企画が目白押し。新幹線や長距離バスの中では、いつも持参のMDやiPodを聴いている私だが、今年の新幹線のグリーン席ではそれは不要。なぜなら、新幹線のグリーン席にセットされているオーディオには、今年はずっとモーツァルト生誕250周年を記念したモーツァルトの曲がいっぱい流れているから。

他方、11月3日(金)の「文化の日」、私はいつも日曜日に行くフィットネスクラブでのランニングをこの祝日に切り換えたが、そんな時かなわないのが、祝日午前中のテレビ番組のつまらなさ。日曜日の午前中、私はいつもリモコンでチャンネルを頻繁に変えながら『サンデープロジェクト』と『サンデージャポン』そして『NHK杯将棋トーナメント』を観ながらマシーンで20kmを走っているが、

祝日に行くとはつまらないバラエティー番組しかやっていないのが苦痛の種。ところが、11月3日はこれが違っていた。この日午前中衛星放送でやっていたのが、モーツァルト生誕250周年を記念し山本耕史をキャスターとして起用した、モーツァルトの35歳という短い生涯を描いた特別番組。アカデミー賞8部門を獲得した『アマデウス』（84年）の完成度や満足度には到底及ばないものの、それを観ながらランニングしていれば十分満足……。

さらに運動を終えたこの日は、3時55分から『手紙』（06年）をそして7時から『DEATH NOTE（デスノート） the Last name』（06年）を観て、自宅に戻ってテレビをつけると、『モーツァルト生誕250年目の真実』をやっていたので、これも食事をしながらすべて鑑賞。モーツァルトイヤーとなった今年、あらためて昔凝っていたクラシック音楽への懐かしさを実感していた私だった。

俺だって元少年少女合唱団……

私の音楽好きは生まれつき……？ 幼稚園の頃は木琴をやりバイオリンまでかじっていたし、小学校では4年生から音楽部に入り、合唱団の一員として活躍……。その結果、NHK全国音楽コンクールにも合唱団の一員として出場したが、残念ながら予選で敗退。美しいボーイソプラノの声だった（？）私だから、愛光中学の受験などを無視してもう少し音楽で頑張っていれば、私の人生は大きく変わっていたかも……。もっとも、そんな決断をしていれば、今ドキ己の才能のなさに絶望し、頭を石にぶつけて叩き割っていたかも……？

愛光中学に入っても音楽や美術の授業は大好きだったが、なんせ愛光学園は受験校。現在大問題となっている日本史や世界史の未履修問題が当時もあったのかどうかは知らないが、音楽や美術など大学受験に無関係な科目にはあまり力を入れていなかったのが実情……。ちなみに、愛光学園はカトリックの学校だったため、神父サマによるつまらない(?)倫理の授業はしっかりとやっていたが……。

したがって、音楽や美術の勉強を真面目にやったのは中学2年生までで、3年生以降はまさに受験、受験の灰色の人生……。大学に入学し、フォークソング全盛の時代の中、ギターを購入し、下宿で女の子を口説くための小道具としてこれを十分活用したものの、所詮その程度。1974年に弁護士登録した後も、事務員

たちを引き連れてレコードやオーディオ機器を買いに行ったり、事務所旅行の際はギターを持参して、いい雰囲気の中で歌ったりしていたが、それも所詮素人芸の集まり……？ しかしこんな俺だから、この『合唱ができるまで』の練習風景を観ると、その授業方法のすばらしさに感嘆しつつ思わず力が入るし、ホントに懐かしく思い出されるもの。だって、ホントに少女少女合唱団の一員だったんだもの……。

練習風景と指導方法のすばらしさに感心！

この映画の主人公は、一方ではパリ13区のモーリス・ラヴェル音楽院に所属するアマチュア合唱団約100名。そこには子供から老人までさまざまな男女が参加し、週1回の練習に励んでいる。今、彼らが練習しているのは『真夜中のミサ曲』だが、どのグループのどの練習風景を観てもみんな真剣そのもので、自らの意思で参加し心底から合唱を成功させたいと願っていることがよくわかる。

そして、すごいのはもう1人の主人公モーリス・ラヴェル合唱団指揮者のクレール・マルシャン。パンフレットによれば、彼女自身すごい経歴の持ち主だが、それを知らなくても、映画を観ていればその能力と指導法のすばらしさ、そして音楽への情熱が自然に伝わってくるというもの。この映画はいくつかの練習風景を切り取り、それをただつないでいるだけだから、そういう意味では何の変哲もない映画だし、何がすばらしいとアピールしている映画でもない。ところが、その練習風景や指導風景を観ているだけで観客はスクリーンに引き込まれていくから不思議なもの。特に私は小学生時代、中学生時代、あんな練習をしていたナと懐かしく思い出されると共に、もっと続けていけばなあという感慨があるだけに、余計にその練習風景のすばらしさに引き込まれてしまう。今の日本にはこんなすばらしいアマチュア合唱団があるとは到底思えないだけに、さすが音楽の都パリ、さすがモーツァルトやベートーベンを生んだヨーロッパと感心した次第……。

絶対音感とハニホヘトイロハ……

私は昔、車で事務所へ通っていた時は、ABCラジオの『おはようパーソナリティ道上洋三です』をよく聴いていたが、彼の自慢は自称「絶対音感の持ち主」ということ。それを前提にギターを弾いたり、CDを出したりしていたが、さて

そのレベルのほどは……？ 大好きだった音楽の勉強が中途半端に中学2年生の時点で終わったことにかかなり強い後悔の気持ちを持っている私が憧れるのも、その絶対音感。それは到底ムリだが、小さい頃から音楽に親しみ、ドレミファソラシドの音を楽器や歌で練習していれば、誰でもかなりの程度、音階や和音はわかるようになるもの。その意味で、大学時代にギターを練習する中、再度昔の音階に関する教科書を持ち出し、ハニホトイロハと並べ、長調と短調を分け、和音を整理し、基本となるハ長調のC・F・G7という3つのコードだけでたくさんの曲が弾けることを学んだだけでも大いに意味があった。またそれが、その後カラオケ全盛時代となる中、大いに役立ったことはまちがいない……？

「団塊世代」の音楽への回帰が再度始まっている今、こんな映画を観て、こんな練習風景に触れれば、「俺も60歳になればまた楽器をやりたいナ」などと思ってしまうが……。

もう少し聴きたかったが……？

さあ、これから本番！ 今日ではモーリス・ラヴェル音楽院に所属する総勢約100名のアマチュア合唱団が、クレール・マルシャン指揮の下に合唱する晴れの舞台。約90分間にわたって各パートの練習風景を観てきた私にも、おじさんやおばさんたち、そしてたくさんの子供たちの実力がメキメキと上達していることがわかるため、本番での舞台を大いに楽しみに……。しかして、いよいよその合唱が始まった。ところが、練習風景を映し出していたのと同じように、その本番の冒頭部分を5、6分間描いたところで字幕が入って映画は終了……。

私はこの晴れの舞台をもう少し観たかったと思い、試写室で配給会社の担当者にその感想を述べたところ、さすがプロの目は違う。日本映画ならそのようにつくるかもしれないが、それを観せないところがフランス映画の奥深いところ、とのこと。たしかにそう言われれば、この映画のタイトルは『合唱ができるまで』。つまり、本番での結果がどうなるかよりも、まさに「合唱ができるまで」の過程が大切だし、この映画はそれを描くことを目的としたものなのだ。そう考えれば、マリー＝クロード・トレユ監督のこのような描き方にも心から納得！

2006（平成18）年11月9日記